



優秀賞 [高校生の部]

## 世界に目を向けさせるために、 「世界問題」の授業を行おう

千葉県 私立 市川高等学校 2年

近藤 柚香 こんどう ゆか

義務教育の学年ごとに世界で起こっている問題を学び、世界への視野を段階的に広げていく教科、「世界問題」を提案。論理的に組み立てられたプロジェクトである点や、日本の教育を変える実効性に、審査委員の評価が集まりました。

今回この小論文に取り組むにあたって、「壊さ」なければならぬほどの大きな問題点が自分の身のまわりにあるのかどうか、考えてみた。改善すべき点、手直しが必要な点などは思いつくのだが、どうしても「壊すべきもの」が見当たらない。生命が脅かされることのない安全な社会、整備された教育システム、病気になるばききちんとした治療を受けることができるし、おいしくて安全な食べ物も手に入る……。一体何を「壊す」必要があるのだろうか。

しかしこの夏、私は、そのような意識を変える経験をした。外国の大学生とディスカッションをするプログラムに参加したのだ。そのプログラムで世界の貧困問題について話し合ったとき、1人の学生にこう指摘された。「日本人は裕福で不自由のない生活をしているから、世界中で起こっている様々な問題に対して無関心である。だから、それらの問題がいかに深刻なのか、自分たちがいかに恵まれているのか分かっていないのではないか」と。

日本人も、世界中で起きている様々な問題を知らないわけではない。高度に情報化された現代においては、得ようと思えば、ありとあらゆる情報が手に入る。しかし、この指摘によって、私は単に「知っている」ということと「分かっている」ということは異なるのではないかと気付かされた。日本の学生と異なり、外国の学生は世界で起きている問題に真摯に向き合い、解決しようとする行動力を持っている。

日本に住んでいる人々のほとんどは何不自由なく暮らし、飢えに悩まされることも危険にさらされることもない、自分たちの現状に満足している。だから、外国では十分に食べ物もなく戦争やテロに巻き込まれている人々がいることを知っただけで、自分たちに直接関係がないために、その問題を深刻に捉えることがない。それは、本当の意味では分かっていないということである。この「自分たちの現状に満足」しているという内向的な殻こそ、私たちが壊すべきものなのだ。

一方、日本人には道徳心や思いやりがある。小さい頃から、

「人の気持ちを考えなさい」「相手の立場になって考えなさい」と教育されるため、自分だけ良ければいい、という考え方をする人は少ない。ずっと日本で生活しているとそれが普通だと思ってしまうが、他の国には、自分本位な考え方をする人が多いようである。その証拠に、インターネットには、日本に来た観光客が日本人のちょっとした心遣いに感動した、というような話があふれている。このような「思いやりの心」は「守るべき」ものだと考える。世界中で起きている深刻な問題を本当の意味で理解した時、思いやりの心を持った日本人ならば、問題を解決するために何ができるのか、何をすべきなのか、考えるようになるのではないだろうか。

「自分たちの現状に満足」している内向的な殻を壊し、日本人の持つ思いやりを世界で起きている問題の解決に役立てるために、私は義務教育の小学校と中学校で週に一度「世界問題」という教科を設けて授業をすることを提案する。「世界問題」の授業では、9年間を通して、世界で起きている問題を、単なる知識として覚えるのではなく、深く理解し、自分たちの力で何ができるかを考えることを目的とする。

小学校の6年間では、主に世界で起きている問題は何があるのかを学ぶ。どういう問題が起こっているかを知るだけではなく、なぜ起きているのか、それによって誰がどのように苦しんでいるのかを学ぶことで、日本人の自分たちがどれだけ恵まれた環境にいるのか、世界で今起きている問題がどれだけ深刻なことかを実感することができる。下学年では、外国の自分と同じ年の子供たちの生活を学ぶ。例えば、毎朝遠くまで水を汲みに行っている子、命の危険にさらされながら学校に通う子、家のために学校にも行けず働いている子などについて学べば、自分の恵まれた環境を自覚することができる。上学年では、下学年の個人と個人の比較とは違い、社会や国の単位で何が起きているのかを学ぶ。アフリカでの貧困問題やシリアで起こっ

いる紛争について学び、下学年で学んだ、同じ年の子供たちがさらされている状況は何か作り出しているのか、その原因を考える授業である。

中学校の3年間では、小学校で学んだことを元にして、自分たちがどうすれば問題解決に貢献できるかを考え、それを実践に移す授業を行う。4、5人1組でグループになり、1年を通して、グループごとのテーマに沿って、問題解決のためのプロジェクトを作っていくのだ。中学1、2年生の時には、自分たちの力で実現可能なプロジェクトを作っていく。例えば、使わなくなった文房具やランドセルを集めて外国の子供たちに寄付するなど、学校の生徒や近所の人々の協力を求めてプロジェクトを行うのもいいだろう。学校の授業の一環として行っている旨を伝えれば、学校に通っている子供たちがいない家でも、快く協力してくれるはずだ。自分たちでプロジェクトを作り、それを実践していくことで、自分たちの力でもできることがあるのだという意識を作ることができる。中学3年生では、将来的に実現可能な、大きなプロジェクトを作る授業を行う。自分たちが何をすればいいかを考えるのみではなく、日本がどうしたらいいか、世界がどのように協力すれば問題解決に向かうのかも考えることを目的とする。貧困による飢餓や世界で起こっている紛争など、どんな国からの協力が必要で、どれだけの時間と人手を要するのかを実際に考えることで、自分たちには関係ない問題だという意識を、自分たちが行動を起こさなければならない、自分たちが動けば問題の解決につながるかもしれないという意識に変えることができる。

私たちが大人になり、社会で活躍できるようになっている頃には、様々な問題が現在よりも深刻な状態になる。例として挙げられるのは、人口の増加による食糧問題や地球温暖化である。その時に、社会を動かし先頭に立ってゆく私たち日本人が、世界で起こっている問題に関心を持ち、解決策を打ち出すことは、問題解決への大きな力になり得る。そのためには、子供の頃から世界で起こっている問題を知り、解決策を考えようとする意識を育むことが必要なのだ。

[受賞者インタビュー]

### 自分の想いを 論文にまとめることで 世界の問題に向き合えた



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学校の夏休みの課題でした。

—— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

実際に文章にまとめた時間は1日でしたが、自分の考えをまとめたり、プランを考えることには2週間くらいかけました。

—— この論文を書く上で苦労したことはありますか？

自分の考えを具体的にプランの形にすることには苦労しました。

—— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

今まで漠然と考えていただけだったものを具体的な形にできたことです。このような機会がなければ、世界の問題に真摯に向き合うことはなかったと思います。

—— 今、どんなことに興味を持っていますか？

海外への旅行や留学です。今回の小論文コンテストの表彰式で、海外経験を持つ人とたくさん話げできたことがきっかけです。